

時代の子

大田市山村留学センター長 西村 崇司

「人間は誰もが時代の子であり、時代環境の中を生きてきた」。最近、ある雑誌で目に留まった一節です。一瞬、居住まいをただしました。現在形や未来形があっても良い気がしながら時折りフツと頭をよぎります。

私は日本海から少し奥まった山間部に生まれ大学生の期間を除き、ずっと実家で過ごしています。同級生は一三人で、当時、市内二〇の各町にあった小学校では最も少人数の学校だったように記憶しています。ほぼ半世紀下つたいま、市街地から一七キロメートル奥まった北三瓶地区にある大田市山村留学センターで勤務していますが、北三瓶の小・中学生が一七人、今年度の長期留学生在が一三人のことを思うと、「これぐらいの人数で小学校卒業まで過ごしていたんだ」と感慨深いものがあります。

中学校は校区制だったため、機械的に市街地の一学年が四〇人学級六クラスの大規模中学校へ入学。私たち同級生は二、三人が一クラスに振り分けられ、当時はカルチャー・シヨックやアウエーという言葉は知らず、新しい環境に慣れるのに大なり小なり苦労したはずですし、一方、大規模小学校からの入学者は私たちの扱いに戸惑ったこともあるようです。大人となって同級生と再会した時の思い出話は、大人目線では他愛ないことと片付けられたものの中に、その時の子どもにとってみれば大変だったことが多かったことで話しに花が咲きます。二〇一九年度、都市部の子どもたちが国内数ヶ所にある農村・山村・漁村で一年間過ごす長期山村留学参加者は六二八人で、そのうち四三八人が子どもだけで参加しています（二〇一九年度版全国山村留学実態調査報告書 NPO法人全国山村留学協会）。親元を離れて暮らす、という一点を除けば、いくつかの点で私自身の体験が参考となるかも知れないと思い、以下書いていきます。

今でも不器用ですが、中学校へ上がるまでは、ずいぶん苦労しました。ですから、時たま学園生が包丁や鋸のこを使った料理や工作、農作業をする際に困っていたり、それはそう？ といった場面に出くわすと、コツを覚えればらく楽に、きれいにしかも多くは楽しくできるのにと、つい出ししゃばりたくなります。しかし、その子にあった教え方や時間のかけ方はとても難しいとつくづく感じます。私の場合は、友だちに迷惑をかけたくないという気持ちより一通りのこ

とはできるようになりたい、という気持ちが強かったのか、不器用であることを受け止めてひたすら反復練習をしていました。その一例を皮むきで紹介します。毎秋、吊るし柿（干し柿）を新入園生と手の空いた継続生とで作りますが、包丁を使った皮むき作業は愁嘆場しゅうたんばとなること
がしばしば。「ピーラーでやりましょう」の大合唱から始まります。包丁作業をさせると皮を
むくというよりモノを切るといっていて、実がずいぶん小さくなったり、長く持ちすぎたため
にグチュグチュとなった実がゴロゴロできます。リングの皮むきは、小学校家庭科の定番で居
残りや家に帰ってずいぶん練習したことも良い思い出ですが、最近ではピーラーもOKのようで、
隔世かくせいの感がします。子どもの頃の男子は小型ナイフが上手に使えることがヒーローの条件で、
遊びや子ども同士の競争を通して、鉛筆削りから竹細工、魚介のさばきを学んできました。

こういったことを思い出すと、小さかった頃、近所に住んでいた五歳年上の先輩のことが思
い出されます。この先輩は、少年には不釣り合いな大きさの鉈なたをいつも持ち歩き、これが多く
の遊びや食糧調達——今でいう「アウトドア」——をしていました。後年、中学生の時に読ん
だ井上靖いのうえやすしさんの小説『獵銃』に出てくる寡黙かもくで人を寄せ付けない中年の獵人のような雰囲気
は「まさしくこのような人」と膝を打ったように記憶しています。頻繁ではありませんでした
が、この先輩の後について歩くことがどんな楽しい遊びもよりも優先していた時期がありま

す。なぜか。家や学校や友だちとの関わりでは体験できないことが、この人といればいつもあったからです。

五年前の小学校卒業式の祝辞で、当時はまだその社会実用化の行く先や汎用性が確立していないAI（人工知能）の話をしました。が、今、予想をはるかに超えた進展や拡張がニューラスされています。その根底にあるディープラーニング（深層学習）によるアプローチは、これからさらに深まっていくでしょう。冒頭の言葉を借りれば、私たちは誰もが情報化という時代環境の下で生きていくことになります。しかし、柿の皮むきを教える際も、「Youtubeをみればわかるよ」のような言い方はせずに、柿と包丁を持つ子どもの手に大人が手を添えて、一緒に皮むきをすることが何より大事だと思います。

どんなに技術が発達しても、どんな時代となろうとも、手の大きさ、ぬくもり、手を介しての息遣いは体感した者のみを得られるもつとも大切なものだと思信しているからです。

にしむら・たかし……………

県外の大学を卒業後、出身地の島根県大田市役所に入庁。山村留学に携わっていることも何かの縁と感じている。石見と出雲の国境いで文化や暮らしの違いも体感中。